

学 位 論 文 題 名

壮族社会文化史研究－明代以降を中心として－

学位論文内容の要旨

本論文は中国壮族の社会史および文化史を研究対象とし、主に漢族との民族間関係を検討することを通じて、壮族の文化変容と社会変動とを考察したものである。

序章では、壮族に関する概略が紹介され、本論文の研究方法与課題とが示される。

第1部は壮族の社会変動が扱われる。第1章では、明初に漢族が貴州へ進出したことによって、貴州方面から小規模集団が波状的に広西へ移住したこと、政治的には自立的で文化的には不等質な下位集団が結集・融合して「壮」という種族が形成されたことを論じる。移住当初の生業は狩猟や焼き畑農業であり、各村落は「獐老」を統率者として自立性が高く、階級的分化は低かったとされる。第2章では、壮族の佃農化とそれに伴う社会変動・文化変容が考察される。壮族の佃農化は明の永楽年間（15世紀初頭）から開始され、漢族地主は村落単位で壮族を佃農としていた。漢人地主と壮族との主佃関係は明の中期以降対立が先鋭化し、壮族の武装蜂起が発生した。明朝は蜂起を弾圧し壮族を編籍するとともに、漢人側に対しても招佃に関する規制を行ったが、壮族の佃農化を阻止するものではなく、清代に入ると佃農化は一層進行した。それに伴い平野部では壮族は漢族と同一の村落に居住するようになり、壮族独自の社会体制は解体し、文化面での独自性も失われつつあった。第3章では、漢族による直接統治を受けた壮族と、土官制度という間接統治を受けた壮族とに分けて各々の文化変容の違いを論じる。明末清初に直轄地の壮族は漢人と同一の村落に居住するようになったが、その親族組織は必ずしも父系的な原理に一元化されてはおらず、母系親族も重要な役割を担っていた。またこのころ漢人男性と壮族女性との通婚が開始される。一方、土官地域では土官が村落住民に対して生殺与奪の権力を有し、漢文化の移入も土官の主導のもとに行われるなど直轄地との政治的・社会的体制の顕著な相違が見られた。土官地域には伝統的文化が依然として保持されていた。第4章では、「寨老」と呼ばれる壮族の統率者に関する検討を行う。清代から1933年以前の壮族は寨と呼ばれる村落を基本単位として生活し、寨老は村落内や村落を超える範囲での紛争の調停を行っていた。寨老は人々の結集の中心に位置していたが、寨老と紛争当事者とは二者間の個人的信頼に基づく緩やかな関係にあった。寨老は同時に行政機構の末端に位置し、統治権力は彼を通じて村民を間接的に統治していた。清末に郷約が制定された時期には外来移住民の増加によって治安が悪化し、寨民の一体化が強まった時期であったが、しかし寨民の組織はタイトなものではなく、寨老の地位も流動的であったとされる。1933年「瑶民起義」への弾圧を契機に新行政システムが導入され、寨老の機能は弱体化した。

第2部では、壮族の漢文化受容過程と壮族の文化変容が扱われる。第5章では、土官地域に

における漢文化受容について検討する。明代中末期以降土官層は漢文化を占有的に受容し、反面領民に対しては漢文化受容を制限した。衣服、食品、婚姻などの面で壮族の文化は維持されていたが、土官層は漢文化を受容することで自らの政治的権威と権力の標識としていた。第6章では、壮族の年中行事を扱う。壮族の年中行事は二つに大きく分類される。ひとつは漢族から受容した漢族的な行事、例えば除夜、正月の行事、元宵節、端午節など、二つには漢族的要素と固有の要素が併存する行事、例えば対歌、莫一大王祭などである。これらの行事にはさらに下位区分されるものがあり、また地域的な偏差が見られる。自然環境、漢族との関係の濃淡、政治組織の相違、来歴の多元性などがそうした偏差を生み出した要素である。第7章では、年中行事の地域差をさらに詳細に検討したものである。広西の北部と西部には壮族の独自性が保持されているが、中部と東部に進むにつれて漢化の度合いが強まる。そうした地域性を、各種の行事や行事食品などを素材に詳細に論じたのが本章である。第8章では、莫一大王祭について論じる。莫一大王は壮族の守護神としてあがめられる存在であるが、この祭りは広西北部、西北部を故地とし、そこから広西北部や東南部に移住した集団に限定して見られ、他の来歴を持つ壮族には見られないことから、壮族の来歴の多元性が立証される。またその祭祀の方法には漢族の祭祀様式が混入しており、漢・壮両族の複合的な祭祀であることも論証されている。第9章では、壮族の婚姻習俗が検討される。明末から清代にかけて壮族の婚姻習俗は漢族的習俗の受容という方向で変化が見られた。例えば配偶者選択が当事者主導から父母主導型へと変化した。嫁入り行列や婚礼も漢化した。しかし壮族伝統の対歌を婚礼の日に夜通し行うなどの習俗も残されていた。特に花嫁が生家へ戻り農繁期や正月などに夫の家に来て逗留すること―これを不落夫家という―が社会的に認められていた。不落夫家の本質は、初生児の出生の時点で婚姻が成立（同時に持参財を夫家に搬入する）するという点にあった。

第3部は、壮族と漢族との民族間関係が検討される。第10章では、中国明清王朝の壮族統治体制を論じる。明代中期以降壮族の武装蜂起を弾圧した明朝は、残党が聚居する地域には土司を置いて壮族を間接統治したが、明朝に服従した壮族は「獞戸」として編籍し税役を課し、税役徴収は獞老を通じて行われた。明末清初には府県学や社学を置き、また義学を置いて就学を普及させ、斬進的な習俗改革が試みられた。第11章では、漢族の移住に伴う壮族との関係が検討される。明末以降漢族の広西への移住が本格化した。広西の南部には広東人が、広西北部には湖南人の移住者が多数を占めた。広西の経済的先進地である東南部・珠江流域では、壮族は漢族地主の経済支配を受けその社会体制が解体傾向を示し階層分化も発生した。広西北部の山岳地帯は経済的後進地であったが、ここでは漢族との接触が少なく、壮族は独自の社会体制のもとで集团的統合を保っていた。先の二つの地域の間接地帯では、清末以降壮族が客家の佃農となり、また階層分化も進行したが、しかし東南部よりは壮族と移住民との社会矛盾はかなり遅れて発生し、その程度も小さかった。第12章では、壮族と漢族との通婚が検討される。17世紀以前は壮・漢両族の通婚は発生し難かったと見られるが、17世紀末から18世紀初（清代康熙・雍正年間）には壮族女性と漢族男性との通婚が行われるようになり、清末から民国期になるとこの形態が広範に見られるようになる。その場合言語を含む習俗は漢族のそれが用いられていた。この通婚の進行は壮族の漢化を促進する一要素となっていた。第13章では、壮族とは違って独自の文化を比較的堅持したヤオ族と壮族との全面的な比較が行われる。統治権力との関係で見ると、壮族と平地型ヤオ族は間接統治から次第に直接統治へと変化していったが、山地定着型ヤオ族

・山地移動型ヤオ族の場合、清代中期以降やや統治者の影響が強まったものの、緩やかな統治にすぎなかった。また山地定着型・山地移動型ヤオ族の場合は佃農化や階層分化も顕著には認められず、商人や移住漢人の経済支配も強くは認められなかった。第14章では、広西西部靖西県におけるフィールドワークにもとづいて、壮族的要素が強いと言われる三月三歌節と刺繍・織物製品を取り上げその文化変容を検討する。歌節は現在では民族政策の一環として維持されているが、そこには壮族の主体的な意思も反映しており、民族のアイデンティティ保持の作用を果たしている。刺繍や織物製品は伝統的な技術ではあるが1949年以降は大量生産が進行し産業化しつつある。終章では、以上の論述を要約するとともに、今後の課題を記す。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 津 田 芳 郎

副 査 教 授 梶 原 景 昭

副 査 助 教 授 城 山 智 子

学 位 論 文 題 名

壮族社会文化史研究－明代以降を中心として－

壮族は中国において漢族に次ぐ人口（1990年統計で1550万人）を擁する最大の少数民族であり、現在はその大部分が広西壮族自治区に居住している。本論文はその壮族の社会史および文化史を研究対象とし、歴史民俗学の方法を用い、主に漢族との民族間関係を検討することを通じて、壮族の文化変容と社会変動とを考察したものである。本論文で用いられる資料は、第一に漢語で書かれた文献資料である。壮族は独自の文字を持たなかったが、壮族と長い政治的文化的社会的な接触を保ってきた漢族側には、特に明代以降やや豊富な記述が残されている。本論文が明代以降に時代を限定しているのは、主にこの文献資料の量に制約されたからである。第二に、著者は1980年代以降に可能となった現地調査によって文献資料の制約を補う作業を行っている。著者は頻繁にまた長期にわたって現地に赴き、自ら年中行事に参加し、聞き取りを行い、観察を行うことによって、社会変動と文化変容の実態を確認している。こうして得られた歴史民俗学的研究の成果が本論文である。

本論文は、全三部、序章、終章のほか全15章にわたって壮族の社会変動・文化変容が扱われる。また詳細な地図、図面、現地調査の際に撮影された多くの写真、参考文献一覧が附載されている。本論文の概要は以下のように叙述される。

概して壮族は漢化過程を辿った。明代には直轄地で一定の武装力を保持し、寨老を中心とする独自の村落・村落内秩序が見られたが、それはやがて解体し、清代には漢人の佃農となる傾向が強まるとともに、村落は漢人村落へと吸収されていった。文化の面でも壮族は漢文化を吸収した。しかし壮族の文化を漢文化にすべて置き換えたのではなかった。壮族の年中行事においては壮族的、漢族的要素が併存していた。壮族の守護神を祭る莫一大王祭はこの傾向を顕著に示すものである。このような社会変動・文化変容をもたらした要因としては、壮族を弾圧し、彼らを編籍して漢文化に変えてゆこうとする統治権力の志向、漢人地主の経済的圧力、商人、工匠、農民など様々な階層の漢族移民との頻繁な接触など、壮族をめぐる民族間関係の特徴が指摘される。壮族にはまた、来歴の多様性や漢族との社会関係の濃淡、政治組織の相違、さらには自然環境などの要因に応じた地域差が見られる。莫一大王祭が举行される地域とそうでない地域、土官地域と直轄地域などにそうした相違が認められる。壮族とは一定程度共通する文化を共有しながらも、多くの集団、個々の村落にまで行き着くような多くのレベルの異なる下位集団が結集

して形成された民族集団だと言わなければならない。文化における漢文化受容と自己主張の歴史には、こうした壮族の民族的特徴が映し出されている。壮族とは単一の一枚岩的存在ではない。

塚田氏は一貫して壮族の歴史、文化、社会、習俗を研究し、本論文に見られるような多くの成果を公開してきた。本論文は、既に国立民俗学博物館研究叢書の一つとして出版された『壮族社会史研究—明清時代を中心として—』(2000年)と『壮族文化史研究—明代以降を中心として—』(第一書房、2000年)を合冊したものである。ただし後者の著書は一般向けに出されたものであるがゆえに資料や記述が平易となっており、それを学術論文に書きあらためて提出したのが本論文である。近年中国の少数民族に関する歴史民族学的関心が高まりつつあり、実地調査や文献資料の発掘も行われてきているが、本論文はそれらの資料をも博搜し、おそらく現在使用するあらゆる文献と資料を用いた本格的な壮族の歴史的民族学的研究といってよい。特に壮族の社会と文化習俗とがどのような歴史的変容を被ってきたかという問題は、本書がもっとも力点を置いた部分であって、現在の学界の水準を示す成果と言えよう。

以上の成果に鑑み、本審査委員会は申請論文が博士(文学)を授与するに相応しい研究成果であることを全員一致して認めるものである。